

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 25 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2012～2014

課題番号：24402036

研究課題名(和文)中国朝鮮族の移住労働における女性の役割と「トランスナショナルな家族」の研究

研究課題名(英文)The Study about the Role of women and "Transnational family" around Chinese Korean's Migrant Labor

研究代表者

鄭 雅英 (Chung, Ah Young)

立命館大学・経営学部・教授

研究者番号：90434703

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,100,000円

研究成果の概要(和文)：1990年代以降に急増する中国朝鮮族の国境を越えた移住労働現象の中で、男性より先駆的な役割を果たしたと評価される朝鮮族女性の国外移住に至るプロセス、彼女たちの移住労働における生活戦略と結果として手にした社会的な利益/損失、および出身地に残した家族やコミュニティとの関係維持/再構築の現状について、最新の知見を獲得した。とりわけ中国、韓国、日本(東京、大阪など)各地における朝鮮族インタビューの蓄積により、トランスナショナルな移民生活における女性と家族の問題に関する新たな理論構築に資する多面的な議論と研究成果を残すことができた。

研究成果の概要(英文)：Since 1990's, many Chinese Korean went to foreign countries to be engaged in labor. Since it was estimated that Chinese Korean women played the leading role in their migrant labor compared with men, we investigated of their process to migrant labor, their living strategy, their social benefit or disadvantage, their relation with the family who left for their home country and the influence exerted on their community in China. We interviewed Korean Chinese women at China, Korea, Japan and prepared theory construction about the gender problem bringing by migrant labor.

研究分野：社会学

キーワード：中国朝鮮族 移住労働 少数民族 コリアン ディアスポラ

1. 研究開始当初の背景

中国朝鮮族の移住労働をめぐる既存研究の主流は、中国の市場経済システムの深化に伴い急激に進行した朝鮮族移住労働の実態、とりわけ韓国における外国人労働者としての就労状況や「空洞化」した中国の朝鮮族集住地が抱える課題をテーマにしてきた。しかし、目前の急変する現状分析に焦点が限定される傾向が強く、また集住地が移住先かいずれかの地域における実態研究が中心となっており、両者間におけるネットワーク、人的連続性、問題の表裏一体性などといった有機的連関に関する研究は見当たらなかった。そこで、朝鮮族移住労働者の半数を担うだけでなく、男性より積極的に海外進出の道を開拓し、また家庭やコミュニティとの関連から当該課題に多角的にアプローチできる女性移住労働者に焦点を当てた研究計画を構想した。

2. 研究の目的

中国朝鮮族社会を対象に定性的調査を行い、以下4点を明らかにすること。

(1) 朝鮮族女性が移住労働に従事する社会的、経済的プロセス。

(2) 女性の移住労働が、女性自身の社会的位相(自立/束縛)および朝鮮族コミュニティの伝統的な慣習、教育・文化、経済生活に与える影響。

(3) 国境を越えて形成される家族間関係の維持(あるいは再構築)はどのようなプロセスで行われ、女性移住労働者はどのような役割を果たすのか。

(4) 女性移住労働者が選び取る越境的な生活戦略が、国民国家やナショナリティに与える影響。

3. 研究の方法

本研究では中国朝鮮族女性移住労働と家族をテーマにした現地調査(中国、日本、韓国)と文献資料調査を並行し、調査結果は合宿研究会や公開シンポジウムの開催で社会的共有を適宜図った。具体的研究方法は以下の通り。

(1) 移住労働経験をもつ女性に対する中国、韓国、日本における個別質問調査。

(2) 留守家庭の子どもの家庭生活、心理状況に関する送り出し地域における調査。

(3) 移住労働が急増した後の朝鮮族集住地(中国)の社会状況、特に学校教育、文化活動、社会福祉の状況に関する現地観察調査。

上記の各項目とも、それぞれの関連地における現地調査と収集した資料分析が主体である。(2)に関しては現地で市販されている朝鮮族小中学生作文選集の内容を分析し、家庭に残された子供の心理的状況を研究する手法も採用した。

中国現地調査は、研究代表者と研究分担者のほぼ全員の参加する基軸的な調査を初年度(2012年)と第2年度に各1回行ったほか、

個別ないし複数者による調査を各年度ごとに3-4回おこなった。調査地は延辺朝鮮族自治州の都市部と農村部、朝鮮族集住地のある東北地方都市(ハルビン、瀋陽、大連、青島)、および女性移住労働経験者の居住する上海、無錫である。

韓国現地調査は、朝鮮族移住労働者の集住地であるソウル市内(九老区など)、水原市および済州市である。

(1)に関しては特に日本で一定規模の対面式あるいはアンケート式調査を計画し、既に一定の研究蓄積がある中国、韓国の実態と比較して、日本にける朝鮮族女性と家族の出身地とのネットワークの維持、再編成、生活戦略、今後の展望などを明らかにすることを目指した。

4. 研究成果

(1) 中国現地調査

延辺自治州農村部では、研究初年度(2012年)都市近郊農村のA村、B村および山間部にあるC村を訪問し、移住労働経験や移住労働に関わる諸問題の聞き取りを行い、とりわけA村においては村民委員会を複数回訪問して女性幹部(複数)からのインタビューも行った。また延辺州都市部では、留守家庭での生活経験を持つ朝鮮族大学生複数からの聞き取りも行った。この結果、朝鮮族が国外移住労働に向かう以前の朝鮮族農村状況、韓国への移住労働が始まる1980年代末前後の朝鮮族による北朝鮮、ソ連との個人貿易状況、1990年代以降の主として女性による韓国への渡航プロセスと韓国における労働・生活状況、留守家族とりわけ残された子供の教育に関する現地での様々な対応策など、多くの新知見を得ることができた。ただし2012年秋以降、急速に悪化した日中関係ほかを反映し、延辺州のような少数民族地域における外国人研究者の公開的な社会調査は著しく制限されるようになったため、第2年度以降は部分的な単独調査と研究者からの聞き取りをのぞいて延辺州内での継続調査を断念せざるを得なかった。

朝鮮族集住地の東北地方都市部(ハルビン、瀋陽、大連、青島)では、移住労働経験を持つ朝鮮族女性へのインタビューのほか、各地の朝鮮族小中学校、朝鮮族文化施設、朝鮮族病院、朝鮮族養老施設、朝鮮族企業、朝鮮語テレビ局を訪問して各地朝鮮族コミュニティの変容状況を確認し、また各地の朝鮮族研究者や知識人からも聞き取りを行った。かつて朝鮮族多数の居住していたハルビンなど黒竜江省からは、移住労働による朝鮮族人口の流出が続く一方、多数韓国企業の進出した瀋陽や青島では朝鮮族の新たな集住現象が見られ、移住労働経験者が中国帰国後に従来集住地である吉林省、黒龍江省農村部からこれらの都市部に移住する傾向が確認された。青島での朝鮮族養老施設訪問調査では、

女性の国外進出により家庭内高齢者介護が困難になるなど、移住労働と社会福祉をめぐる朝鮮族社会の新たな問題点も浮き彫りにされた。

(2) 韓国現地調査

韓国各地では、朝鮮族女性から多数のインタビューを得た。また第3年度(2014年)には研究分担者4名が「水原市移住センター」と安山市の「京畿道外国人労働者支援センター」を訪問し、中国朝鮮族をはじめ韓国に在住する外国人労働者の実情と韓国政府および市民団体による「多文化政策」や人権的側面からの支援運動に関して多くの知見を得た。

韓国における諸調査を通じて、中国朝鮮族女性移住労働者の韓国渡航に至るプロセスと、朝鮮族間の人的ネットワークの役割が明らかにされた。1990年代から2000年代初期までは、家政婦や食堂での雇用および韓国人男性との婚姻など女性にとって進出しやすい条件があったため、韓国で働く朝鮮族労働者の中では女性の比率が高かったが、主として在外コリアンを対象に2007年に導入された「訪問就業制度」以降、就業を目的とした韓国への入国条件が大幅に緩和され、入国と就業における自由度が拡大された。この結果、朝鮮族労働者の中国-韓国間の往来が簡易化され家族の呼び寄せも可能になったため、韓国における家族再結合のケースも増えている。ただし、親のいる韓国に渡航した子ども世代朝鮮族の就学、就業が新たな問題として浮上している。また韓国の外国人統合政策である「多文化政策」の対象から中国朝鮮族は(外国人ではなく在外同胞だという名目で)排除されている問題も、韓国社会における朝鮮族の権利上の位置に関する多くの議論を提起している。

さらにパソコンやスマートフォンなど通信機器の画期的普及により、移住労働者と留守家族間のコミュニケーション環境が改善され、従来、移住労働に出た親と留守家族とくに子供との意思疎通が困難であった状況に大きな変化が見られる。一方でこれは、女性労働者の場合、国境を越えた「トランスナショナルな母親(または娘)」という役割を新たに付与することになり、通信機器で結ばれたいわば「バーチャルな家族関係」の出現が目される。

(3) 日本における調査

東京と大阪を中心に、日本に在住する中国朝鮮族へのインタビュー調査を行った。

韓国に比べ、移住労働者の受け入れ枠が極端に少ない日本の場合、労働目的ではなく留学を契機に渡航するケースが圧倒的に多いことは従来から指摘されていたが、日本での学業終了後に日本で就業している朝鮮族が増加していることが、調査を通じて実感されている。数多くのインタビュー調査のほか、

東京や大阪における朝鮮族親睦団体の会合(新年会・送年会、運動会、サッカー大会など)の場を利用したアンケート調査も行い、一定数のサンプルを収集した。2000年代初期に東京で行われた同様のアンケート調査との経年比較、東京と大阪の地域差などの基礎分析は第3年度で完結できず、研究分担者とともに現在も分析を進めているところである。

(4) 研究会ほか

初年度に科研課題に基づく研究会を立ち上げ、各年度とも5-6回の会合を持ち、公開的な研究会や調査結果の共有、シンポジウム、朝鮮族関連地(新大久保、池袋、大阪難波など)のフィールドワークを行った。会場は状況に応じて大阪と東京で交互に行った。初年度には来日中だった延辺大学社会学部の全信子教授、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院の玄武岩教授を招請した研究会を開催したほか、第3年度には延辺大学社会学部の金花善教授を招請し公開シンポジウムを開催し、それぞれの成果を得た(公開シンポジウム内容は、2015年4月刊行の朝鮮族研究学会誌第4号に掲載)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 30 件)

権香淑、中国朝鮮族の再移動と家族分散 - 国籍戸籍取得の局面に着目して、朝鮮史研究会論文集、査読あり、第52号、2015、99-122

宮島美花、移動を説明する諸理論と中国朝鮮族の移動・生活 - 日本在住の朝鮮族の事例から -、香川大学経済論叢、査読なし、第87巻3・4号、2015、185-216

林梅、村の包摂と排除の仕組みから考える移動、朝鮮族研究学会誌、査読あり、第4号、2015、14-22

玄善允、中国朝鮮族中高校生の内的世界 - 『全国朝鮮族中学生優秀作文選』の資料的可能性と限界をめくって、朝鮮族研究学会誌、査読あり、第4号、2015、23-46

林梅、与えられた選択としての国際結婚、東アジア研究、査読あり、第62号、2014、99-111

林梅、国家のはざままで生きる、先端社会研究紀要、査読なし、第12号、2014、1-14

鄭雅英、韓国の「多文化政策」と多文化主義言説 - 移民政策の転換と展望、立命館経営学、査読なし、第52巻4・5号、2014、145-162

呉紅敏、高齢者虐待への法的対応と課題、21世紀社会研究所紀要、査読あり、第5号、2014、21-38

宮島美花、中国朝鮮族の移動と中国の社会保障制度 - 戸籍制度と単位制度から -、北東アジア地域研究、査読あり、第20号、2014、

65-86

宮島美花、中国朝鮮族の移動と韓国の社会保障、査読なし、香川大学経済学部経済年報、53号、2013、73-100

⑪宮島美花、Transmigratory Movement and Life-world of the Korean-Chinese in Northeast Asia; based on Life Histories of Chaoxianzu/ Chosunjok Women, Frontier of North East Asian Studies, 査読あり、Vol.12、2013、69-99

⑫林梅、労働移動の「女性化」と村落構造の変化、日中社会学研究、査読あり、第21号、2013、55-65

⑬榎香淑、A Study on Korean-Chinese Immigration: The Nation-State and Enterprises on Acceptance of Foreign Nationals in Japan、*The Korean Journal of Japanese Studies*、査読あり、No.8、2013、52-79

⑭榎香淑、Korean-Chinese Immigration and Ethnic Community; Practice between Trans-Nationalization and Further Marginalization、*History and Culture*、査読あり、No.44、2012、1-33

〔学会発表〕(計 18 件)

鄭雅英、トランスナショナルな在外同胞生活史—渡日済州島人と中国朝鮮族を中心に、統一人文学フォーラム 2014、2014年11月29日、朝鮮大学校(東京都)

玄善允、中国朝鮮族中高校生の内的世界—『全国朝鮮族中学生優秀作文選』の資料的可能性と限界をめぐって、朝鮮族研究学会 2014年度全国大会、2014年11月15日、一橋講堂(東京都)

林梅、村の包摂と排除の仕組みから考える移動—中国延辺朝鮮族自治州の朝鮮族村の事例から、朝鮮族研究学会 2014年度全国大会、2014年11月15日、一橋講堂(東京都)

宮島美花、中国朝鮮族の移動と移民の社会保障、北東アジア学会全国大会、2014年9月21日、日本大学(静岡県)

林梅、歴史的文化遺産の観光化をめぐる政治的・社会的力学、環境社会学会第48回大会、2013年12月14日、名古屋市立大学(愛知県)

鄭雅英、中国朝鮮族と朝鮮戦争、第14回立命館大学コリア研究センター国際シンポジウム、2013年11月11日、立命館大学(京都府)

鄭雅英、日本における外国人管理政策の問題点—韓国の多文化政策との比較から、第3回中日韓言語文化比較国際シンポジウム、2013年8月20日、延吉(中国)

榎香淑、“Korean-Chinese Migration and Northeast Asian Regional Dynamism: The Paradox of Ethnic Identity,” 26th biannual AKSE(Association for Korean Studies in Europe) Conference in Vienna, 2013年7月8日、ウィーン(オーストリア)

榎香淑、“Some Phases on the Korean-Chinese Migration in the Modern Northeast Asia; From Disconnection to Connection,” Limited Borders vs Unlimited Boundaries, The 3rd SSK International Conference on Border Issues; The Institute of Border Studies、2013年6月21日、ソウル(韓国)

鄭雅英、中国朝鮮族の現状と課題、朝鮮族研究学会 2012年度大会、大阪経済法科大学麻布台セミナーハウス、2013年3月16日(東京都)

⑪宮島美花、中国朝鮮族の跨境生活—生活史の聞き取り調査から、朝鮮族研究学会関西西部会、2012年7月1日、大阪経法大学布施ISD(大阪府)

〔図書〕(計 7 件)

林梅、中国朝鮮族村落の社会学的研究—自治と権力の相克、お茶の水書房、2014、214ページ

榎香淑、鄭根植ほか、コリアンディアスボラと東アジア世界、京都大学学術出版、2013、72-90

6. 研究組織

(1)研究代表者

鄭 雅英 (Chung Ah young)

立命館大学・経営学部・教授

研究者番号：90434703

(2)研究分担者

呉 弘敏 (Go Kobin)

大阪経済法科大学・教養部・准教授

研究者番号：00469256

榎 香淑 (Kwon Hyang suk)

大阪経済法科大学・アジア研究所・研究員

研究者番号：00626484

宮島 美花 (Miyazima Mika)

香川大学・経済学部・准教授

研究者番号：10452666

出羽 孝行 (Dewa Takayuki)

龍谷大学・文学部・准教授

研究者番号：20454530

林 梅 (Lin Mei)

関西学院大学・社会学部・助教

研究者番号：20626486

玄 善允 (Hyon Sonyun)

大阪経済法科大学・アジア研究所・教授

研究者番号：80388636

